

アオリイカ産卵床の設置・管理技術交流会

沖縄県宮古支庁農林水産課

1. 課題名

アオリイカ産卵床の設置・管理技術交流

2. 目的

宮古地区は、珊瑚礁が発達し、礁湖内のホンダワラ、アジモ場はアオリイカ（通称白イカ）の産卵場となり、イカ曳き、小型定置網で漁獲され高値で販売されている。

平良市漁協狩俣漁業生産グループは、モズク養殖に使用した古網を利用して、産卵床を設置し、資源の維持増大につとめているが、産卵基質、設置時期等の課題があり、技術・知識の向上を図る目的で、先進地の鹿児島県名瀬漁協青年部、龍郷漁協青年部との交流会を実施した。

3. 交流年月日

平成7年5月17日（水）～5月20日（土）

4. 交流場所

鹿児島県名瀬漁業協同組合、龍郷漁業協同組合
交流グループ（名瀬漁協青年部、龍郷漁協青年部）

5. 参加者

平良市漁協狩俣漁業生産グループ

与那覇吉嗣、根間 靖

自主参加

平良市役所水産課振興係長 宮 国 泰 男

沖縄県宮古支庁農林水産課 長 嶺 巖

6. 交流地の概要

奄美大島は、那覇市から飛行機で1時間20分、南西諸島の最北端に位置し、人口は約15万人、山間部の地形が多いことから農業よりも水産業が盛んで、黒潮海域を利用した浮漁礁漁業、瀬物一本釣等の漁船漁業、リアス式内湾を利用した魚類、

クルマエビ養殖漁業が盛んにいとなまれている。

奄美群島には14漁協があり、平成5年度の海面漁業の生産量が7,760トン、生産額で108億6,714万円で、そのうち養殖漁業の生産額は80億3,074万円である。

7. 交流内容

吉野名瀬漁協長の歓迎を受け、会議室で漁協青年部との交流を行う。

名瀬漁協青年部は平成3年4月に結成され、現在部員数は27名。主な活動はシラヒゲウニ放流調査、ヤコウガイ放流追跡調査、コブシメ産卵試験、マダイ中間育成・放流、イカ柴設置・追跡調査、漁港内の清掃、ソフトボール大会など多彩な活動に取り組んでいる。

イカ柴の投入は、アオリイカの産卵場造成と資源保護を図るため青年部発足当初から取り組んでいる事業で、毎年200基を名瀬湾口部山羊島地先の水深20mの海域に投下している。

また、新しい試みとして日本栽培漁業協会八重山事業場で研修したコブシメの産卵床の設置事業に取り組んでいることを青年部長から報告。

昼食後、青年部が用意したイカ柴を船に積み込み名瀬漁港を出港、防波堤から500m地先の水深20mの海域に漁船をスローで進行させながら5m程度の間隔でイカ柴を投下した。

今回のイカ柴は、交流会用に青年部が前日にわざわざ山から木を切ったり、サンドバックに砂を積めたりと漁を休んで準備して頂いたようで大変感激した。

8. 効果的なイカ柴投入

(1) 産卵床基質

名瀬漁協青年部が産卵床に使用しているイカ柴は、椎の木、いすの木、マルバニッケイなどであ

る。それらの基質は広葉樹で葉が落ちにくく影を多くつくり、においが少ないのが理由で選定している。

沖縄本島北部では調達できるが、宮古島ではほとんどないため、狩俣漁業生産グループが実施しているモズク古網を束ねて基質に使用した方が効果的と考えられる。

(2) 設置の場所及び水深

設置の場所は砂地が最適で、波浪の影響が少ない入り江や内湾が効果が高い。

水深は、15 mから25 mの比較的深い砂地が適している。

*宮古島では、水深2～3 mの浅い場所でモズク網に産卵することから比較すると産卵水深を今後検討する必要がある。

(3) 産卵後の仔イカ保護

アオリイカは産卵してから25日程度で孵化して産卵床の周辺を遊泳しているが、餌付けや特別な保護対策は施していない。孵化寸前の卵を陸上水槽に収容して孵化させて中間育成後に放流することも検討しているがまだ実施していない。

コブシメ（コウイカ類）については陸上孵化の試験に取り組んだことがあったが、水温のコントロール等課題が多く全滅させたことから今年は中断した。アオリイカも同様である。

(4) 産卵床の効果的な設置時期

奄美群島での産卵時期は、3月から7月上旬までの5カ月間と長期に及び産卵盛期（ピーク）は5月から6月、以前は3月からイカ柴を投入していたが、青年部の調査で産卵盛期がわかってきて、平成6年度からは基質の効果を高めるため5月上旬に設置している。県水試報告によると、沖縄県は2月から7月までと一ヶ月早く、産卵盛期（ピーク）は、4月から5月と一ヶ月ほど早い。

(5) 資源管理の取り組み

産卵床を設置事業によってアオリイカの資源は増えているが、一般の遊漁者は棧橋やボート釣りでも自由に釣っている現状である。漁業者は、値段の安い小さいイカを保護するため大きい疑似餌

で釣っている。遊漁者は小さいサイズ疑似餌で小イカでも釣っている。

今のところ禁漁時期、体長制限、禁漁区などの規制は漁協段階でも行っていないため、一般にも呼びかけていないが、将来は奄美群島全体の自主規制をつくり資源管理をしていく必要があり、当面は基礎的にデータづくりのためにも青年部が中心となって産卵床設置事業を継続して取り組んでいくとのこと。

(6) アオリイカの漁期、漁具・漁法

龍郷漁協青年部との交流会で漁期、漁具・漁法の意見交換ならびに乗船研修を行う。

午前10時龍郷漁協に到着すると、前日懇親会に参加した漁協青年部の役員3名の出迎えを受け、漁協会議室でアオリイカ漁業の意見交流を行う。

龍郷漁協では、3年前から漁協の組合員でイカ柴投入事業を実施してきたが、平成6年4月に漁協青年部設立を契機にして青年部の事業として継続実施している。

産卵基質の木は名瀬漁協青年部と同じ柴を使っているが、設置水深が25 mから40 mと深い。設置水深が深い理由は、屋久島に先進地視察をしたときにイカ柴に産卵に来たイカ、産卵後のイカを屋間一本釣りや曳き縄で漁獲していることをヒントに産卵床での漁獲効果もねらって深い場所に投下している。

今回は、3月20日に投入したイカ柴を青年部員2名が潜水調査した結果、まだ産卵が確認できなかった。産卵時期が昨年と比べ、少し遅いようだと意見があった。アオリイカ漁業は、定置網で漁獲するほか、一本釣り、曳き縄で漁獲している。漁期は10月から6月までで盛漁期は、2月から6月とのこと。

イカ曳き縄は、沖縄県那覇市沿岸漁協から導入したようで漁具・漁法は別図2のとおり。

9. 交流所感

今回の技術交流会に参加して感じたことは、漁協青壮年部がアオリイカ資源の増殖に熱心に取り

組んでいること。

1 漁協だけでなく、奄美水産振興青年協議会が中心となって各青壮年部との連絡調整をとりながら青壮年部間の協力体制をしていることは大変参考になった。

また、産業改良普及事業をはじめ、市町村、漁協、青壮年部、各種生産部会との連携が充実して漁業者の要望に基づいて水産振興の諸施策がつけられ、アオリイカ産卵礁設置にも各市町村で予算化して取り組んでいることには感心させられた。

狩俣漁業生産グループは、昭和56年に設立されて、モズク養殖の推進、中学生の漁業体験学習、海神祭の取り組みなど多彩な活動に取り組んでいるが、モズク養殖の不振から若い漁業者加入が少なくマンネリ化している。

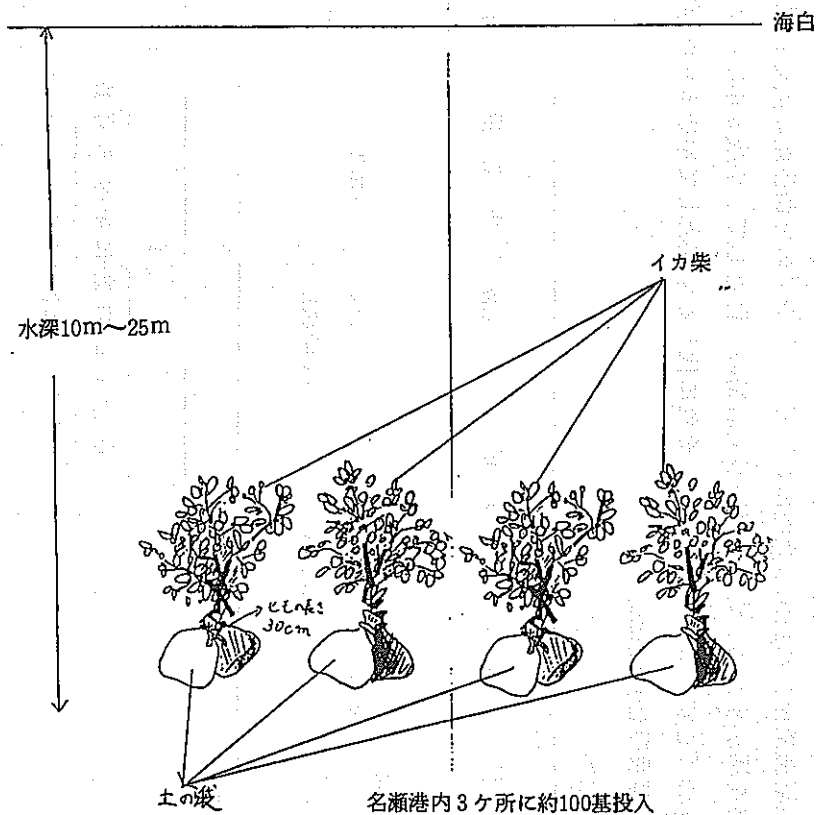
今回の技術交流会は、新しい漁業、資源管理型

漁業への取り組みを積極的に取り組んでいく上で、奄美大島の若い漁業者の意見交換ができただけでも大変有意義であった。

技術交流会の受け入れ窓口となっていた名瀬、龍郷漁協ならびに各青年部との連絡調整を図って頂きました奄美水産業改良普及所の前田所長をはじめ普及員のご苦労には大変感謝申し上げます。

さらに、漁を休んで交流会や、乗船視察まで快く引き受けて頂いた名瀬漁協青年部、龍郷漁協青年部のみなさんの絆の深さ、奄美群島水産青年協議会の活動には大変勉強させられました。

漁協主催の夜の懇親会で、「奄美は沖縄は同じ民族」との歓迎の言葉に、私たちが初心に帰って海からの島おこしに頑張らねばと決意を新たにしました。



事業計画書

1. 事業の目的

平成3年度に発足した名瀬漁協青壮年部では、平成3年度と4年度にかけて名瀬市青少年海外研修助成事業により、沖縄県石垣市で視察を行い、(社)日本栽培漁業協会八重山事業場において、コブシメの種苗生産の実施状況を研修した。

その成果を活かすため、青壮年部の事業活動の一貫として、平成5年度にコブシメの産卵・中間育成・稚魚放流を目的とし事業を実施したがコブシメの産卵が確認できずに事業を断念した。それに代わる事業として平成6年度事業でイカ柴による水イカ等の増殖を目的としたイカ柴設置事業を行う。

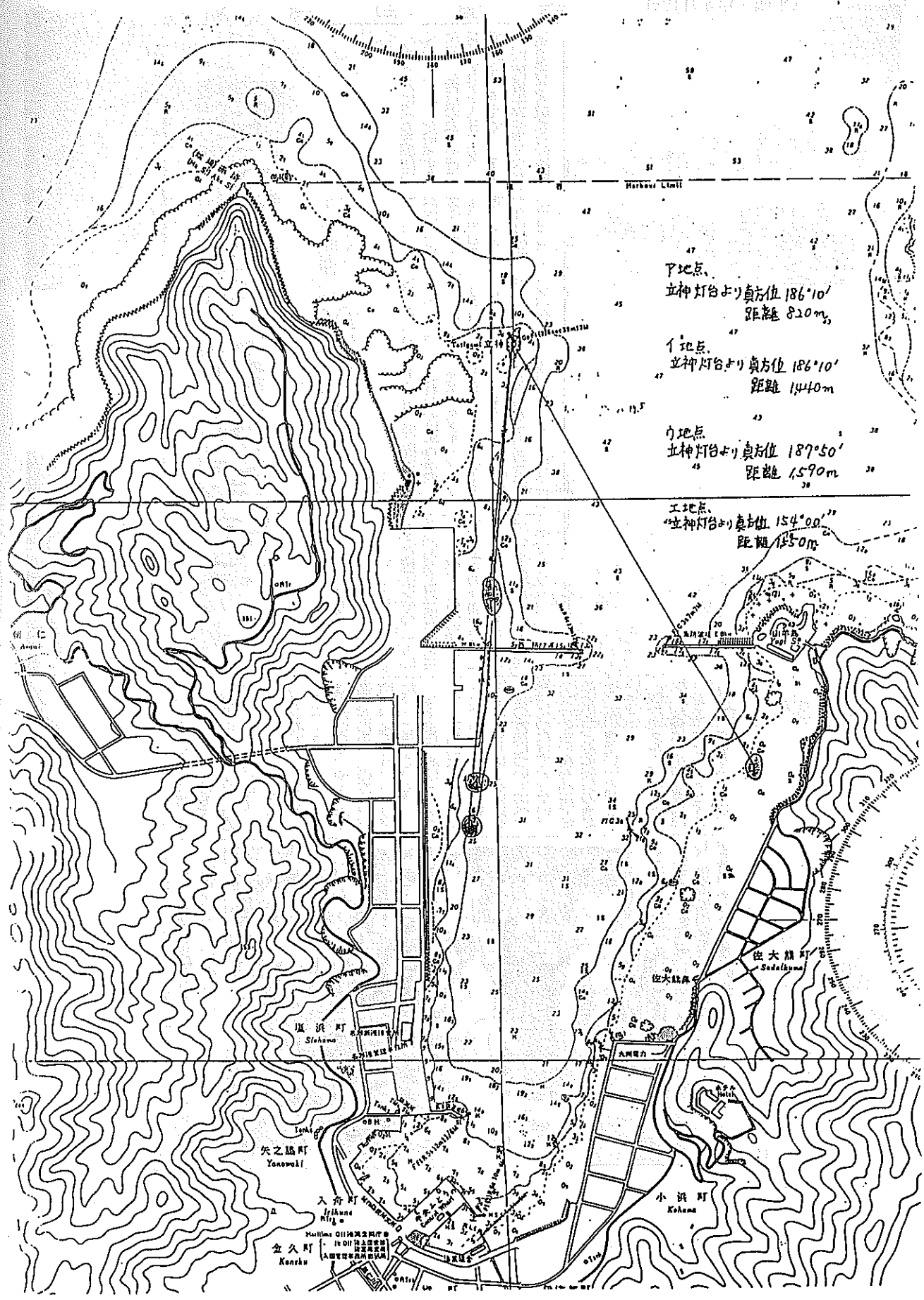
2. 事業の内容及び経費の配分

(1) 事業の内容

事業種目	事業実施場所	事業主体	事業量	事業費	事業完了 予定年月日	補助金交付 決定年月日	備考
名瀬漁協青壮年部 活動費(イカ柴設置 事業)	名瀬港内4カ所 (別紙図面参照)	名瀬漁業 協同組合	イカ柴等一式	300,000円	平成6年 5月14日		

(2) 経費の区分

事業種目	事業費	負担区分						備考			
		間接補助事業に要する経費		市補助金		漁協			その他		
		補助対象	補助対象外	金額	割合	金額	割合		金額	割合	
名瀬漁協青壮年部 活動費(イカ柴設置 事業)	300,000円	300,000円	0円	300,000円	1 — 2	150,000円	1 — 2	0円			
計	300,000円	300,000円	0円	300,000円	1 — 2	150,000円	1 — 2	0円			



P地点
 立神灯台より真方位 186°10'
 距離 820m

1地点
 立神灯台より真方位 186°10'
 距離 1440m

0地点
 立神灯台より真方位 187°50'
 距離 1590m

工地点
 立神灯台より真方位 154°00'
 距離 1550m

立神
 Tategami

矢之島町
 Yasushima

入舟町
 Irikane

金久町
 Konchu

佐大船町
 Sadafune

小浜町
 Kobama

宮古島から視察団

イカ産卵 技術交流、奄美で 床づくり

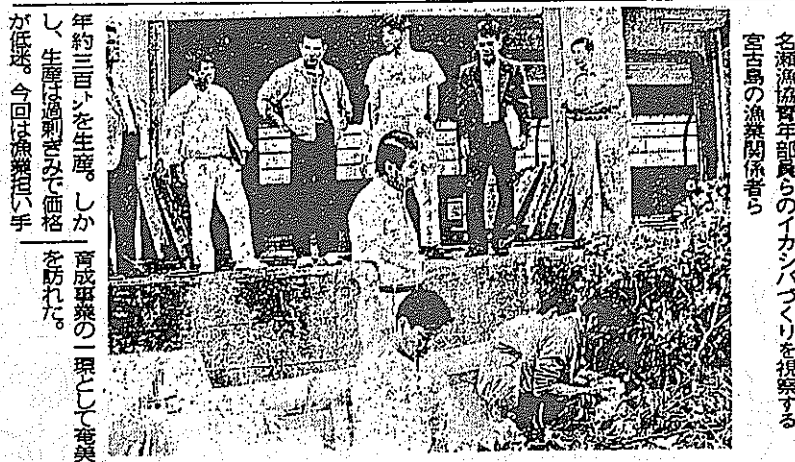
イカシバによる産卵床づくりの技術などを研修するため、宮古島の漁協や行政関係者が十八日、初めて奄美大島を訪れた。一行は名瀬漁協青年部や奄美水産業改良普及所職員らの説明

でイカシバづくりから名瀬市内での投入までを見学。製作も簡単に経験もかからない産卵床づくりの大きな関心を示していた。一行は十九日に龍郷町で実際に卵が付着したイカシバを見学

して同日帰路に就く。防れたのは平良市漁協狩俣漁業生産グループの専那副吉嗣さんら。相聞崎さんらをはじめ、同市水産課漁協関係の宮園泰男係長、宮古支庁農林水産課の長瀬

慶主任技師の四人。一行は名瀬漁協で青年部員や奄美水産業改良普及所の前田一巳所長らの歓迎を受けた後、早速イカシバづくりの説明ポイントなどについて説明

引率の長瀬主任技師は「イカシバづくりは、宮古島ではモンスン収獲後の網でイカシバの産卵が確認されており、イカシバの産卵も相当あるものとされている。相聞崎さんは「イカシバづくりは経験もかかるが、もともと価値がある。この方法で資源が増えられたらありがたい」と話していた。長瀬主任技師は「沖繩本島でも本格的なイカシバ投入はあられていない。奄美でのイカシバによる効果や管理の仕方について調べる将来についてはいい。モンスンの古い網も利用できるのかな。産卵基質の検討をしていきたい」と話していた。



名瀬漁協青年部員らのイカシバづくりを視察する宮古島の漁業関係者ら

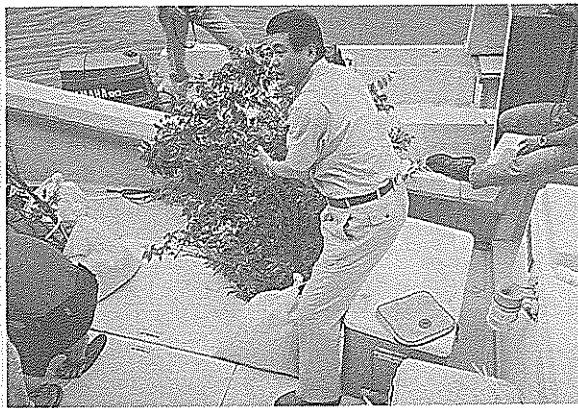
同生産グループはイカシバの養殖、小型産卵網漁が盛んで、中でもイカシバは約十五年前から手掛けている。今回は産卵床づくりを

育成事業の一環として奄美を防れた。



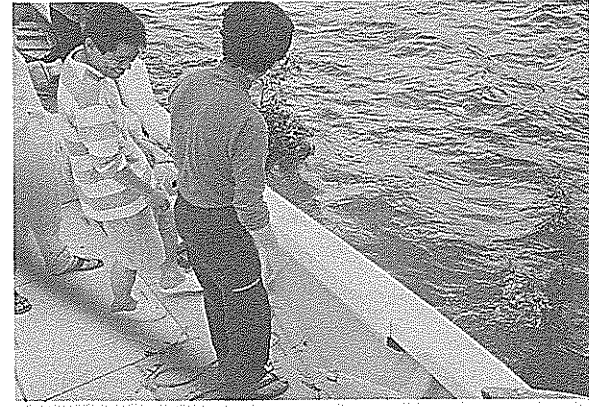
1960年10月10日
船中にて植物を育てる

1960年10月10日
船中にて植物を育てる



1960年10月10日
船中にて植物を育てる

1960年10月10日
船中にて植物を育てる



1960年10月10日
船中にて植物を育てる

1960年10月10日
船中にて植物を育てる

